

平成28年度

北海道教育大学
附属函館幼稚園だより

NO. 2 【号】

平成28年4月28日（月）



表現は子ども、そのもの。

私は、大学で学部院生対象に子どもの表現理解に関する講義を行っています。その中で、子どもの表現活動に内在する「思いや願い、育ち・学び等」を読み取ったり、目覚めさせ・引き出したりする教育的手法の根っこの考え方として「表現は子ども、そのもの」を伝えています。そして、「子どもにとっての（ひょうげん）」と「親・指導者にとっての（ひょうげん）」を下記のように捉えるように言っています。

「子どもにとって」

ひ・ひらめき（感じたこと等）
よ・よろこび（感情の表出）
う・うけわたし（イメージの共有）
げ・元気（全身をつかって）
ん・んーっと（いどみ）

「親・指導者にとって」

ひ・ひつつく（寄り添うきっかけ＝生活理解）
よ・よみとり（体験・興味・躰き等の解釈）
う・うけわたし（表現法を伝える）
げ・元気になる（表現する喜びを味合わせる）
ん・ん？と振り返り（自分の実践の評価）

では、どのように親や教師が、子ども達が自信と達成感を持って自身である表現に能動的に取り組むようにすればよいのでしょうか。私はそのヒントを鴨川に配置されている飛び石の上を軽快に飛び越える子ども達とそれを見守る保護者の姿からいただきました。

子ども達は、毎日の幼稚園や家庭生活の中で出会う新たな体験という流れの川を飛び越え、成長しています。始めて出会う課題という川の流れを、子どもの育ちの状態に応じて下記の図の様に親や教師が関わることで、主体的に幾つかの飛び石を伝って乗り越え、「挑み、やり終えた」という喜びと共に、新たな自分を作り出していくと考えています。



どうしても、チャレンジに戸惑う子の姿を見ると手を貸してしまうのが親心。まずは、お子さんの育ちの様相と飛び石の幅（課題の難易度）をよく見比べ、適切な支援をおこないたいものですね。